

## ＜ラウンドテーブル報告 2＞

# 初年次教育で班活動を通じて ゼミ発表スキルを獲得させる方法

藤田哲也<sup>1</sup>・安永 悟<sup>2</sup>  
法政大学・久留米大学

### 1. 本ラウンドテーブルの趣旨

#### (1) 設立大会における位置づけ

本ラウンドテーブル（以下、RT と略す）は、設立大会時に開催された他の RT に比べると、より実践的であり、個々の授業の展開に関わるテーマを取り上げた。授業を活性化するヒントを掴んでもらおうと思い、フロアの参加者にも作業をお願いした。実態としては「ワークショップ」と呼ぶ方がふさわしい内容となった。

#### (2) ラウンドテーブルの担当者

今回の RT 担当者は、二人とも、教育心理学を専門領域として研究および実践を行っている。

藤田は、法政大学文学部心理学科の教員であり、FD 推進センターの学習・教育支援プロジェクトのリーダーでもある。そのプロジェクトの一環として、藤田が担当する初年次教育の授業「基礎ゼミ」を、モデル授業として学内外に公開している（このことの詳細は、本号の藤田論文を参照されたい）。その「基礎ゼミ」で後期に行っている班活動を中心とした授業運営について報告し、その運営に際して留意した点を心理学的に解説することが、本 RT の趣旨の一つである。

もう一人の担当者の安永は、日本における協同教育の第一人者である。安永自身の教育実践の場である大学・短大はもちろんのこと、初等・中等教育においても、協同による学び合い（協同教育）の考え方を幅広く導入し、成果を挙げている。

#### (3) ラウンドテーブルにおける担当者の役割分担

本 RT においては、藤田が法政大学で行っている初年次教育における教育目標および教育方法の一部を、模擬授業に類したやり方で紹介することを第一の目的とした。その意味で、藤田の役割は、RT 報告者であると同時に授業者であった。RT 参加者には、RT のかなりの時間を受講生（学生）として過ごし、初年次教育の授業を体験してもらえるように意図した。

一方、安永の役割は指定討論者であり、授業アドバイザーであった。具体的には、藤田の紹介した授業実践に対して、協同教育の専門家の観点から解説を加えると共に、模擬授業における、一つひとつの指示の出し方や説明の仕方について、改善点を指摘するという役割を担っていた。

つまり、本 RT は「公開授業検討会」の様相を呈するという趣向で行われた。RT 参加者には、単に先行事例としての授業実践に関する情報を得るだけでなく、その実践の持つ意味を理論的枠組みから捉え直すことの必要性と意義を理解してもらうことを意図した趣向であった。

<sup>1</sup> 法政大学文学部 fujita009@nifty.ne.jp

<sup>2</sup> 久留米大学文学部 yasunaga\_satoru@kurume-u.ac.jp

## 2. 本ラウンドテーブルの内容

### (1) 法政大学で藤田が実施している「基礎ゼミ II」の紹介

藤田が法政大学文学部心理学科向けの初年次教育科目として担当している「基礎ゼミ」では、前期「基礎ゼミ I」では学習スキルの習得を、後期「基礎ゼミ II」では班活動を中心としてゼミ発表スキルの習得を、主な教育目標にしている。ただし、初年次教育に限らないことだが、単に学生数名で班を構成し、課題を与えるだけでは、いわゆる「フリーライダー」が出現するなどして、学生の間にもむしろ班活動に対する否定的な印象が根付いてしまう恐れがある。そこで、協同学習の考え方にに基づき、「協同学習の五つの基本原理」、具体的には「話し合いの際にミラーリングを必ず行うこと」や「二つの意味での個人の責任を果たすこと」などを学生に強調し、より有意義な班活動ができるように配慮した授業を展開している。

学生に示した、班活動における作業目標は「法政大学文学部心理学科に進学しようかどうか迷っている高校生に、オープンキャンパスでどのようなことを伝えれば、法政で学びたいと思わせることができるか」というものであった。この作業目標を達成できるような、(他の受講生を高校生と見立てた)プレゼンテーションを15分で行うというのが、授業における発表課題であった。この課題設定は、発表スキルを習得するだけでなく、発表内容に関する情報を学生自身が収集し、その意義を理解し、魅力的にアウトプットする過程の中で、自分が所属している大学・学部・学科や自分の専攻する学問分野に対する魅力が内化するよう意図したものであり、結果として学生がより適応的な学生生活を送れるようになることを期待したものであった。

RTでは、この基礎ゼミの授業運営上の工夫をいくつか具体的に紹介した。そのうちの 하나가、いきなり発表テーマについて話し合うのではなく、協同学習の原理を事前に説明した上で、まずは「話し合い」のためのトレーニングを数回の授業を通じて積むことから始めるというものであった。RT参加者には、実際に授業で用いた課題に取り組んでもらい、協同学習に基づいた話し合いの技法である「ミラーリング」を通じた「傾聴」「受容」について体験してもらった。

### (2) 安永による藤田の授業実践の解説と改善アドバイス

藤田の「基礎ゼミ」を模倣した体験授業が終了したところで、安永が協同教育の観点から、当該の授業の展開についての解説を行った。まず、協同教育・協同学習の考え方についての概略を説明した後、授業で班活動を指導する際には、「協同の場」である集団作りという要素と、課題を構造化し協同の場面を作り出す授業づくりという要素の二つについて留意すべきであることが強調された。協同学習の基本要素を具現化するという観点から、藤田の行った授業方法について、より教育効果を上げるための改善アドバイスがなされた。例えば、課題を学生に与える際には、作業目標を明示すること(課題明示)や、課題終了時に、その課題に取り組んで得られたことを班の中で共有する機会を設けること(活動の振り返り)の必要性などが指摘された。

### (3) まとめ

初年次教育学会の果たすべき役割の一つとして、効果的で学生にとっても魅力ある授業方法の蓄積が挙げられるだろう。ただし、単に表面的な授業テクニックのみを集約しても、多様な文脈を持つ各大学での教育現場で、何がどのように効果をもたらすのかは不明瞭になると思われる。経験的に効果があると感じられた授業方法についても、教育心理学等の理論に照らし、ある程度の一般化や抽象化を試みるのが、本当の意味での「実践の蓄積」につながると考える。本RTの目的には、そのような姿勢を具体的に示すことも含まれていた。今後も、また違った文脈で、異なる教育目標に向けて、適切な教育方法がどうあるべきかを考えるRTを企画していきたい。